

中国語の定形コントロール補文とゼロの照応詞

王 丹丹

キーワード：コントロール補文、定形節、不定形節、ゼロの照応詞、pro

1. はじめに

(1a) (1b) に示すように、英語のコントロール補文は必ず不定形節でなければならない。その不定形節の空主語は、主文の主語または目的語と同一指示を有し、顕在的主語と交替することはできない。このような空主語は PRO として分析される。一方、(1c) に示すように、定形節の主語は主文の要素によってコントロールされず、主文以外の人物を指示することもできる。よって、コントロール解釈は PRO だけがもつ特徴であるとも思われる (cf. Kuroda 1983, Hasegawa 1984/5, Landau 2004 など)。

- (1) a. John₁ intended [PRO₁*₂/*he₁/₂ to go to Paris].
b. John₁ persuaded Bill₂ [PRO*₁/₂/*₃/*he₁/₂/₃ to go to Paris].
c. John₁ said that [he₁/₂ will go to Paris].

(2) は (1) に対応する中国語である。先行研究では、(2a) (2b) のようなコントロール補文は英語同様に不定形節で、また、補文の空主語 e は PRO であると分析されている (Huang 1982, 1984, 1989; Li 1985, 1990; 湯 2000 など)。

- (2) a. 约翰 1 打算 [e₁*₂ 去 巴黎]。
John intend go Paris
b. 约翰 1 说服 了 比尔 2 [e*₁/₂ 去 巴黎]。
John persuade ASP Bill go Paris
c. 约翰 1 说 [他 1/₂ 要 去 巴黎]。
John say he will go Paris

しかし、周知のように、中国語は屈折変化をもたない言語であるため、ある補文が定形節であるか不定形節であるかということは英語のように動詞の形態から見分けることはできない。また、(3) に示すように、中国語のコントロール補文は英語とは異なり、空主語だけでなく顕在的主語も出現可能である。よって、(2a) (2b) のような補文を不定形節と分析し、その補文の空主語を PRO として分析してよいのかという疑問が生じてくる。

- (3) 约翰 打算 [自己/他自己 (也) 去 巴黎]。
John intend self/himself too go Paris

また、近年のコントロールに関する研究によって、コントロール現象は不定形節のみに見られるものではないことが究明されている。例えば、ヘブライ語 (Hebrew) やバルカン

言語 (Balkan languages) などにおけるコントロール補文は定形節の仮設法補文である (cf. Landau 2004)。このようなことから、中国語のコントロール補文、主にその節タイプおよび補文の空主語の性質について再検討する必要があると考える。

本稿では、中国語のコントロール補文について考察し、以下の3点を主張する。1) 中国語のコントロール補文はすべてが不定形節なのではなく、定形のものも含む。例 (2a) (2b) のような補文は定形のコントロール補文である。2) 中国語の定形コントロール補文の空主語は PRO ではなく、“自己”(自分)、“他自己”(彼自身) といった再帰代名詞のゼロ形式であり、pro として分析すべきである。3) pro は PRO 同様に代名詞的なものと照応的なものを含む。代名詞的 pro は伝統的に言われる代名詞のゼロ形式であり、照応的 pro はコントロール補文などの環境に見られる再帰代名詞のゼロ形式である。

本稿の構成は以下ようになる。2節では、中国語のコントロール補文に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。3節では、中国語では2種類のコントロール補文——定形のコントロール補文と不定形のコントロール補文——があることを示す。4節では、中国語には再帰代名詞に対応するゼロの照応詞が存在することを示し、定形コントロール補文の空主語は PRO ではなく、再帰代名詞と交替する pro として分析すべきであることを述べる。5節では、pro を再定義し、pro には代名詞的 pro と照応的 pro があることを提案する。6節では、本稿で行う中国語に関する議論は日本語にも適用できることを示す。最後に、7節では本稿のまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究の概観とその問題点

2.1 Huang (1989), Li (1990), 湯 (2000)

Huang (1989)、Li (1990)、湯 (2000) などは、論証する方法は異なるものの、中国語のコントロール補文は不定形節であり、その空主語は PRO であるという分析で一致する。この節では、Huang (1989) と Li (1990) の議論について詳しく見ることにする。

Huang は、中国語では、補文に AUX (iliary) 要素 (アスペクトマーカ―やモーダル要素) を許すか否かによって定形節と不定形節を区別することができるとする。それによると、コントロール補文は不定形節で、AUX 要素を排除するが、非コントロール補文は定形節であり、AUX 要素が出現できる。この対立は、コントロール動詞“逼”(強制する)を含む (4) と非コントロール動詞“说”(言う) や“相信”(信じる) を含む (5) から観察される。

(4) a. 我 逼 李四 [e 来]。

私 強制する Lisi 来る

‘私は Lisi に来るように強制した。’

b. * 我 逼 李四 [e 会/能/应该 来]。

私 強制する Lisi だろう/できる/べきだ 来る

c. * 我 逼 李四 [e 来 着]。

私 強制する Lisi 来る ASP

(Huang 1989: 189)

(5) a. 张三 说[(他) 来 了]。

Zhangsan 言う 彼 来る ASP

‘Zhangsan は (彼が) 来たと言った。’

b. 张三 相信[(他) 会 来]。

Zhangsan 信じる 彼 だろう 来る

‘Zhangsan は (彼が) 来ると信じている。’

(Huang 1989: 188)

Li (1990) も中国語のコントロール補文を不定形節、非コントロール補文を定形節とする。また、両者は同一節条件 (the same clause condition) に従うか否かにおいて違いがあるとしている。Li は、中国語の“任何”(いかなる) は否定要素によって認可される場合、必ず否定要素と同一節に出現しなければならないという。しかし、(6a) のように、この同一節条件は非コントロール動詞を含む文では遵守されるが、コントロール動詞を含む文では、(6b) に示すように、遵守されない。Li は、このような違いが生じるのは、コントロール補文は不定形節であって、その節境界が NPI 認可に関して透明であるのに対し、非コントロール補文は定形節であり、節境界を超える NPI 認可をブロックするためであると論じている。

(6) a. * 我 没有 告诉 他[你 做 任何 事情]。

私 ない 知らせる 彼 あなた する いかなる こと

b. 我 没有 劝 他[做 任何 事情]。

私 ない 勧める 彼 する いかなる こと

‘私は彼に何かするように勧めなかった。’

(Li 1990: 21)

また、Huang、Li、湯によると、(5a, b) のように、非コントロール補文は定形節であるため、空主語だけでなく顕在的主語も出現でき、その空主語は pro である。一方、コントロール補文は不定形節で、顕在的主語を認可せず、空主語は PRO であるという。

(7) * 我 逼 李四[他 来]。

(Huang 1989: 190)

私 強制する Lisi 彼 来る

2.2 先行研究の問題点

2.1 節で見たように、Huang (1989)、Li (1990) などは、コントロール補文と非コントロール補文を対立させることによって、定形節と不定形節が区別できると述べている。しかし、Xu (1986)、黄 (1992)、徐 (1994, 1999)、Hu, Pan, Xu (2001) などで指摘されているように、そのような区別は実際には存在しない。例えば、(8) (9) はコントロール補文であるにもかかわらず、非コントロール補文と同様、そこにモーダル要素、アスペクトマーカ一、顕在的主語が現れている。また、(10) は非コントロール動詞を含む文ではあるが、コントロール動詞を含む文同様、同一節条件に従わない。

(8) a. 我 准备[e 明天 要 来]。

(徐 1999: 164)

私 つもりだ 明日 Mod 来る

‘私は明日来るつもりだ。’

b. 妈妈 逼 小明[e 吃 过 药]。 (黄 1992: 385)

母 強制する Xiaoming 食べる ASP 薬

‘お母さんは Xiaoming に強制して薬を飲ませたことがある。’

(9) a. 经理 准备[自己 动手]。 (徐 1999: 167)

社長 つもりだ 自分 着手する

‘社長は自分が着手するつもりだ。’

b. 我 劝 张三[如果 没有 人 买 这 本 书,

私 勧める Zhangsan もし ない 人 買う この CL 本

他 也 不要 买]。

(Hu, Pan, Xu 2001: 1131)

彼 も するな 買う

‘私は Zhangsan にもしこの本を買う人がいなければ、彼も買わないようにと勧めた。’

(10) 我 没有 告诉 过 他[你 要 做 任何 坏 事情]。

私 ない 知らせる ASP 彼 あなた Mod する いかなる 悪い こと

‘私は、あなたがどんな悪いことをしようとしても、彼に知らせたことはない。’

(Hu, Pan, Xu 2001: 1129)

中国語のコントロール補文を不定形節、非コントロール補文を定形節とするという分析では、このような現象を説明できない。次節では、中国語のコントロール補文に注目し、その節タイプについて考察する。

3. 中国語における二種類のコントロール補文

湯 (2000) では、コントロール補文をとる動詞には“准备”(するつもりだ)、“逼”(強制する)といったコントロール動詞のほか、アスペクト動詞“开始”(始める)、“继续”(続ける)、“结束”(終わる)、能力を表すモーダル動詞“能”、“会”、“可以”(できる)などもあるとされている。これらの動詞がとる補文では、主語コントロール動詞同様、空主語は必ず主文の主語と同一指標をもたなければならない。

(11) a. 张三 1 开始/继续/结束[e1/*2 调查 这 个 问题]。

Zhangsan 始める/続ける/終わる 調査する この CL 問題

‘Zhangsan はこの問題を調査し始め/続け/終えた。’

b. 张三 1 能/会/可以[e1/*2 说 5 门 外语]。

Zhangsan できる 話す 5 CL 外国語

‘Zhangsan は五か国語を話せる。’

また、湯は、これらの動詞は“准备”(するつもりだ)、“逼”(強制する)といったコントロール動詞同様、不定形節をとるとしている。しかし、次の3.1節に示すように、“开始”(始める)などのアスペクト動詞および“会”(できる)などの能力を表すモーダル動詞(以下、“开始”類動詞と呼ぶ)がとる補文と、“准备”、“打算”(するつもりだ)といった主語コントロール動詞(以下、“准备”類動詞と呼ぶ)がとる補文との間には大きな違いが存在する。

3.1 二種類の主語コントロール補文の相違点

まず、(12) に示すように、“准备”類動詞がとる補文では（主文と異なった）時間修飾成分が出現できるが、一方、(13) (14) に見られるように、“开始”類動詞がとる補文ではそれが許されず、時間修飾成分は主文にしか出現できない。

- (12) a. 张三 准备/打算[明天 参加 比赛]。
Zhangsan つもりだ 明日 参加する 試合
‘Zhangsan は明日試合に参加するつもりだ。’
- b. 张三 今天/现在 准备/打算 [明天 参加 比赛]。
Zhangsan 今日/今 つもりだ 明日 参加する 試合
‘Zhangsan は今日/今のところ、明日試合に参加するつもりだ。’
- (13) a. * 张三 会/能/可以[明天/将来 说 5 门 外语]。
Zhangsan できる 明日/将来 話す 5 CL 外国語
- b. * 张三 开始/继续/结束 [明天 调查 这个问题]。
Zhangsan 始める/続ける/終わる 明日 調査する この CL 問題
- (14) a. 也许, 张三 明天/将来 (就) 会/能/可以[说 5 门 外语]。
かもしれない Zhangsan 明日/将来 すぐ できる 話す 5 CL 外国語
‘もしかしたら、Zhangsan は明日/将来五か国語を話せるかもしれない。’
- b. 张三 明天 开始/继续/结束 [调查 这个问题]。
Zhangsan 明日 始める/続ける/終わる 調査する この CL 問題
‘Zhangsan は明日この問題を調査し始め/続け/終わる。’

“准备”類コントロール構文では、補文述語が表すイベントの発生時間は主文述語の発生時間に依存し、必ず主文述語が表すイベントの発生時間より後にならなければならない。このような依存関係はあるが、(12b) に示すように、これらのコントロール補文では主文と異なった時間副詞も出現できる。一方、“开始”類動詞を含むコントロール補文では、補文の述語が表すイベントは主文の述語が表すイベントと同時に発生する。このようなコントロール補文では時間副詞の出現を許さず、時間副詞は主文にしか出現できない。

次に、2.2 節で見たように、“准备”類動詞がとる補文では顕在的主語“自己”(自分)が出現可能である。それに対して、“开始”類動詞がとる補文では顕在的主語“自己”(自分)は出現できない。

- (15) a. * 看到 李四 会/能/可以[说 5 门 外语], 张三 很 羡慕,
見る Lisi できる 話す 5 CL 外国語 Zhangsan とても 羨む

¹ 徐 (1999)、Hu, Pan, Xu (2001) は、コントロール補文では再帰代名詞“自己”は常に出現できると主張している。しかし、徐 (1999: 167) 自身も認めるように、(9a) のような補文に現れる“自己”は主語であるか副詞成分であるかははっきり分別できない場合もある。筆者の内省によると、(9a) の“自己”は主語ではなく副詞的成分である。本稿では、主語の“自己”がコントロール補文に出現できることを証明するために、前の文と並行的あるいは対比的関係をもつ文脈を作り、さらに、“自己”の後ろに取り立て詞“也”(も)を加え、前の文の主語と並行する文法機能をもつことを明示する。

经过 努力, 他 能/会/可以 [自己 也 说 5 门 外语] 了。

経る 努力 彼 できる 自分 も 話す 5 CL 外国語 ASP

- b. * 听说 别人 开始/继续/结束 [e 调查 这个问题],
聞く 他人 始める/続ける/終わる 調査する この CL 問題
张三 开始/继续/结束 [自己 也 调查 这个问题]。

Zhangsan 始める/続ける/終わる 自分 も 調査する この CL 問題

もちろん、次のように、“开始”類動詞がとる補文でも“自己”が現れる場合もある。しかし、たとえ特殊な文脈の中に置かれても、これらの“自己”は単独でしか現れず、その後ろには“也”(も)を付けることができない(cf. 注 1)。これは、これらの“自己”は前の文脈の主語と並行的な文法機能をもっておらず、副詞的成分であることを示唆する。

- (16) a. 这个 小孩子 会/能/可以 [自己 穿 衣服] 了。(不是 依靠 妈妈 帮忙。)

この CL 子供 できる 自分 着る 衣服 ASP ではない 頼る 母 助け

‘この子供は自分で服を着ることができるようになった。(母親の助けによらずに。)’

- b. * 那个 小孩子 会 穿 衣服,

あの CL 子供 できる 着る 衣服

这个 小孩子 会/能/可以 [自己 也 穿 衣服] 了。

この CL 子供 できる 自分 も 着る 衣服 ASP

さらに、この2種類の補文はAUX要素の出現の可否に関しても異なる。2.2節で述べたように、“准备”類動詞がとる補文ではアスペクト要素が出現する場合がある。しかし、次に示すように、“开始”類動詞がとる補文では、それらは出現できない。

- (17) a. * 张三 开始/继续/结束 [学习 了/过/着 日语]。2

Zhangsan 始める/続ける/終わる 学習する ASP 日本語

- b. * 张三 会/能/可以 [说 了/过/着 5 门 外语]。

Zhangsan できる 話す ASP 5 CL 外国語

このように、“准备”類動詞と“开始”類動詞はコントロール補文をとるという点では共通しているが、その補文に時間修飾要素や頭在的主語、あるいはアスペクト要素などが出現できるか否かという点では異なった振る舞いを見せる。そのため、“准备”類動詞がとる補文と“开始”類動詞がとる補文を区別して分析すべきであると考えられる。

3.2 中国語の補文タイプ

前節で見たように、コントロール補文をとるという点では共通しているが、“准备”類補文と“开始”類補文との間には大きな相違点がある。このような相違点が生じるのは両補文

2 (i) のように、“继续”がとる補文では、述語があらわす動作の持続時間成分を加えると、アスペクト要素“了”が出現する場合がある。なぜこのような場合に“了”が出現できるのかは今後の課題にしたい。

(i) 张三 继续 [看 了 一个 小时的 书]。

Zhangsan 続ける 見る ASP 1 CL 時間 の 本

‘Zhangsan は本を一時間読み続けた。’

が異なった節タイプを有するからであると考えられる。本節では、補文における時間修飾要素の出現可能性に着目し、両補文が異なった節タイプをもつことを示す。

Sybesma (2007) は、オランダ語との比較対照を通じて中国語にも時制一致 (Tense Agreement) 現象があり、T 節点 (TNode) が存在すると述べている。Sybesma は、オランダ語には現在や過去を示す時制辞が存在するものの、その時制辞の時制を表す意味が漂白されており、単独では時制を表すことができないと指摘している。

(18) a. Ik woon in Rotterdam. (Perfect! present tense only)

1s live in Rotterdam

‘I live in Rotterdam.’

b. # Ik woonde in Rotterdam. (Very odd/infelicitous in isolation)

1s live.PST in Rotterdam

‘I lived in Rotterdam.’

c. Ik woonde in 1989 in Rotterdam. (Perfect! Past tense only)

1s live.PST in 1989 in Rotterdam

‘I lived in Rotterdam in 1989.’

(Sybesma 2007: 582)

(18b) では、動詞に過去を表す時制辞が付いているにもかかわらず、単独の文として過去のイベントを表すことはできない。しかし、(18c) のように、時間副詞 “in 1989” を加えるだけで過去を表す文として成立するようになる。このことから、Sybesma は、オランダ語における時制辞は意味的に漂白されており、単なる一致形態素 (Agreement Morpheme) にすぎず、時間副詞 “in 1989” と一致関係をなすものであると述べている。

重要なのは、Sybesma がこのような時制一致現象は中国語にも存在するとしていることである。次の例に示すように、(19b) は単独の文としては過去を表すことができないが、時間副詞 “1989年” を加えると成立する。³

(19) a. 我 住 在 鹿特丹。 (OK! 現在時制)

私 住む に Rotterdam

‘私は Rotterdam に住んでいる。’

b. # 我 住 在 鹿特丹。 (単独の文としては過去のイベントを表せない)

私 住む に Rotterdam

‘# 私は Rotterdam に住んでいる。’

c. 我 1989年 住 在 鹿特丹。 (OK! 過去時制)

私 1989年 住む に Rotterdam

‘私は 1989年に Rotterdam に住んでいた。’

(Sybesma 2007: 582)

これらのことから、Sybesma は、中国語にはオランダ語と同じように、時制一致現象があると主張する。つまり、(19c) の時間副詞 “1989” 年は (18c) の時間副詞同様、過去を表

³ Sybesma (2007) について反論し、中国語には時制がないとするのは Lin (2010) があるが、紙幅の関係で、Lin (2010) については別の機会で論じることにする。

す時制形態素と一致をなすものなのである。ただし、オランダ語の時制形態素は顕在的なものであるのに対し、中国語ではそれが非顕在的のものであるという。

Sybesma の議論が正しければ、次のことがいえるだろう。すなわち、中国語では、ある補文に時間副詞が出現できれば、その補文には当該時間副詞と一致をなす非顕在的時制形態素が存在する。つまり、その補文は [+Tense] 素性をもつ。逆に、ある補文に時間副詞が出現できなければ、その補文には非顕在的時制形態素は存在せず、[-Tense] 素性をもつ。

ところで、石 (2001: 24) では、定形節と不定形節を区別することの実質は動作行為の時間情報を区別することそのものであるとされている。また、Li (1990)、湯 (2000) は、中国語における定形節と不定形節は [\pm Tense] 素性を用いて区別することができるとしている。これらのことを勘案すると、中国語では時間副詞の出現を許す補文は定形節であり、それを許さない補文は不定形節であるといえる。

一方、3.1 節で見た 2 種類のコントロール補文であるが、“准备” 類動詞がとる補文では(主文と異なった) 時間副詞が出現できるのに対して、“开始” 類動詞がとる補文ではそれが許されない。この違いは、前者には時間副詞と一致をなす非顕在的時制形態素が存在するが、後者にはそれが存在しないためであると考えられる。そうすると、前者は時制要素を含む定形節であるが、後者は時制要素を含まない不定形節であると考えられる。このことは顕在的主語や AUX 要素の出現からも証明できる (cf. Huang 1989, Li 1991, 湯 2000 など)。

4. 定形コントロール補文の空主語の性質

3 節では、先行研究で不定形節とみなされるコントロール補文は実は定形節であり、その補文の空主語は再帰代名詞“自己”と交替できるということを述べた。そうすると、そのような空主語は先行研究で分析される PRO ではなく、再帰代名詞のゼロ形式、つまり、ゼロの照応詞 (Null Reflexive Pronoun) と分析すべきであると考えられる⁴。一方、Chomsky (1981)

⁴ 一般的な見方では、PRO は不定形節に出現し、定形節の空主語は PRO ではないとされる (cf. GB 時代の PRO の定理、MP 時代のゼロ格) が、近年の研究には、PRO は定形節にも出現すると主張するものもある。例えば、Landau (2004) は、ヘブライ語やバルカン言語における定形コントロール補文の空主語を PRO として分析している。しかし、本稿は、Landau の議論は中国語には適用できないと考える。

まず、Landau は [\pm T] と [\pm Agr] を用いて PRO の出現環境を規定するが、周知のように、中国語には一致要素は存在しない。そのため、[Agr] を用いる分析はそもそも中国語には適用できないと考えられる。

次に、Landau は、PRO は [-R] (Referential) をもち、顕在的要素/pro は [+R] をもつとしているが、この議論は妥当ではないと考える。なぜならば、言語一般においては PRO だけが [-R] をもつ要素ではなく、顕在的要素であっても [-R] をもつものがあるからである。それが再帰代名詞である。Landau は、(i) のヘブライ語の空主語を PRO と分析する。(i) の空主語は主文の要素によってコントロールされるが、同じ位置に出現する顕在的主語は主文の要素と別指示になるためである。

(i) Himlacti le-Gil1 [se-PRO1/*2/Dani2/hu2 yearsem la-xug le-balsanut
I-recommended to-Gil that-PRO/Dani/he will register.3SG.M to-the-department to-linguistics
'I recommended to Gil to register to the linguistics department.'
'I recommended to Gil that Dani/he should register to the linguistics department.'

(Landau 2004: 813)

しかし、(9) に示すように、中国語では同様の環境において空主語だけでなく、顕在的再帰代名詞“自己”も主文の要素によってコントロールされる。したがって、[-R] の空主語であっても、すべてが PRO ではなく、再帰代名詞のゼロ形式である可能性もある。以上より、空主語がコントロールされるため PRO であるという分析は適切ではないと考える。

の空範疇の分類に従うと、移動によって派生したゼロ照応詞 (NP・痕跡、WH・痕跡) は存在するが、基底生成のゼロ照応詞、つまり、再帰代名詞に対応するゼロ形式は存在しない。本節では、中国語に再帰代名詞に対応するゼロ照応詞が存在する証拠を示し、定形コントロール補文の空主語がゼロ照応詞として分析できることを論じる。

まず、分離不可能所有構文ではゼロの再帰代名詞が存在すると考える。(20a) では、“头发”(髪の毛)の前に所有関係を表す修飾要素はないが、中国語母語話者であれば、その髪の毛は他人のものではなく主語 Zhangsan のものであると判断するだろう。この解釈は (20b) も同様であるが、(20c) は異なる。(20b) では「髪の毛」の前に所有者を表す再帰代名詞“自己”があり、この“自己”は主語 Zhangsan しか指せない。一方、(20c) では「髪の毛」の前に所有者を表す代名詞“他”(彼)があり、この“他”は主語 Zhangsan も Zhangsan 以外の人物も指すことができる。(21) は (20) の類例である。(21a) の“脚”(足)は主語 Zhangsan のものであり、この解釈は再帰代名詞“自己”を含む (21b) と同じである。一方、(21c) では、“脚”の所有者は Zhangsan であっても、Zhangsan 以外の人であってもよい。

(20) a. 张三 1 染 了 e1/*2 头发。

Zhangsan 染める ASP 髪の毛

‘Zhangsan は髪の毛を染めた。’

b. 张三 1 染 了 自己 1/*2 的 头发。

Zhangsan 染める ASP 自己 の 髪の毛

‘Zhangsan は自分の髪の毛を染めた。’

c. 张三 1 染 了 他 1/2 的 头发。

Zhangsan 染める ASP 彼 の 髪の毛

‘Zhangsan は彼の髪の毛を染めた。’

(21) a. 张三 1 弄 伤 了 e1/*2 脚。

Zhangsan する 傷つく ASP 足

‘Zhangsan は足を傷つけた。’

b. 张三 1 弄 伤 了 自己 1/*2 的 脚。

Zhangsan する 傷つく ASP 自分 の 足

‘Zhangsan は自分の足を傷つけた。’

c. 张三 1 弄 伤 了 他 1/2 的 脚。

Zhangsan する 傷つく ASP 彼 の 足

‘Zhangsan は彼の足を傷つけた。’

これらの事実は、(20a) (21a) の目的語「髪の毛」、「足」の前には“自己”に対応するゼロの成分の存在を示唆する。ただし、(20a) と (20b)、(21a) と (21b) の意味はそれぞれ全く同じではない。例えば、(20a) は次の2つの状況で使われる。1つは、Zhangsan が自分で髪の毛を染めた場合、もう1つは、Zhangsan が自分で染めたのではなく、誰かに染めてもらった場合である。それに対して、(20b) は後者の読みをもたず、前者の読み、つまり、

Zhangsan が自分で髪の色を染めたという意味しか表せない。この解釈上の違いは、Chomsky (1981) の「代名詞を回避せよ」(Avoid Pronoun) という原則を用いて説明することができる。つまり、ある成分を表す時、ゼロ要素も顕在的要素もある場合、顕在的要素よりもゼロ要素を優先的に用いる傾向がある。わざわざ顕在的要素を用いると、特別な意味解釈が得られやすい。

また、崔 (2006, 2008) によると、中国語の結果構文においてもゼロの再帰代名詞の存在が観察される。中国語の結果構文では結果述語が主語について叙述し、直接目的語制約 (Direct Object Restriction)⁵ に違反するように見えるものがある。例えば、(22b) は「Zhangsan が咳をして、その結果、Zhangsan が目覚めた」という意味を表し、結果述語“醒”(目覚める) は主語について叙述するように見える。このような現象について、崔は、ゼロの再帰代名詞を仮定すれば、その結果述語が主語ではなく、ゼロの再帰代名詞の目的語について叙述していると分析することができ、直接目的語制約には違反せずに済むと分析している。

- (22) a. 张三 咳 醒 了 李四。
 Zhangsan 咳をする 目覚める ASP Lisi
 ‘Zhangsan が咳をして、(その咳声で) Lisi は目覚めた。’
- b. 张三 1 咳 醒 了 e1/*2。
 Zhgnsan 咳をする 目覚める ASP
 ‘Zhangsan は咳をして目覚めた。’
- c. ? 张三 1 咳 醒 了 自己 1/*2。
 Zhangsan 咳をする 目覚める ASP 自分
 ‘Zhangsan が咳をして、自分が目覚めた。’

これらのことから、中国語ではゼロ形式の再帰代名詞が存在するといえるのではないか。そうであるならば、中国語の定形コントロール補文の空主語が、再帰代名詞“自己”と交替するゼロの照応詞であると分析することも可能である。

5. 代名詞的 pro と照応的 pro

4 節では、中国語にはゼロの再帰代名詞が存在する証拠を示した。しかし、前にも触れたように、ゼロの再帰代名詞は Chomsky (1981) の空範疇の分類には入っていない。そのため、ゼロの再帰代名詞の位置づけが問題になってくる。本稿は、ゼロの再帰代名詞は顕在的な要素と交替することができるという点では pro に相当し、照応的 pro と見なしてよいと考える。

Chomsky (1981) では、PRO は [+pronominal, +anaphoric] 素性をもち、pro は [+pronominal, -anaphoric] の特徴をもつとされている。GB 理論では、PRO が同時に [+pronominal] と [+anaphoric] をもつのは PRO の出現位置を保障するためであると考え

⁵ 直接目的語制約: 結果述語の叙述対象は直接目的語に限られる (Levin & Rappaport Hovav 1995 など)。

られる。つまり、PRO は統率されない位置に出現する⁶。しかし、ミニマリスト理論では、統率の概念が廃棄されてしまい、PRO が同時に [+pronominal] と [+anaphoric] をもつ理論的根拠もなくなる。また、すでに GB 理論時代から、PRO が同時に [+pronominal] と [+anaphoric] をもつことは批判されている。Bouchard (1984) は、PRO は同時に [+pronominal] と [+anaphoric] をもつのではなく、局所的にコントロールされる PRO は [+anaphoric] 素性をもち、長距離コントロールされる PRO および恣意的解釈をもつ PRO は [+pronominal] 素性をもつとしている。ミニマリスト理論の枠組みでは、Hornstein (1999) なども同様の立場をとり、義務的にコントロールされる PRO は照応的 PRO であり、非義務的にコントロールされる PRO は代名詞的 PRO であるとしている⁷。

(23) a. John₁ intended [PRO₁ to go to school]. (照応的 PRO)

b. John₁ told Mary₂ [that [[PRO₁₊₂ washing themselves] would be fun]].
(代名詞的 PRO)

c. It was believed [that[[PRO_{arb} shaving] was important]]. (代名詞的 PRO)

一方、Huang (1989) は、PRO と pro は意味解釈の面において類似し、pro は PRO 同様に自由に解釈される場合もあれば、コントロールされる場合もあると指摘している。(24a) における pro は主語 Zhangsan と同じ指標をもたなければならないため、コントロールされる pro であるといえる。それに対して、(25) では、埋め込み節の空主語 pro は主文の主語 Zhangsan もそれ以外の人物も指すことができ、自由解釈をもつ pro である。

(24) a. 张三 1 骑 马 骑 得 pro_{1/2} 很 累。(コントロールされる pro)
Zhangsan 乗る 馬 乗る DE とても 疲れる
'Zhangsan は馬に乗ってとても疲れた。'

b. 张三 骑 马 骑 得 马 很 累。
Zhangsan 乗る 馬 乗る DE 馬 とても 疲れる
'Zhangsan が馬に乗って、馬がとても疲れた。' (Huang 1989: 192)

(25) 张三 1 说 [pro_{1/2}/他 1/2 每天 都 去 学校]。(自由解釈の pro)
Zhangsan 言う 彼 毎日 全部 行く 学校
'Zhangsan は毎日学校に行くと言った。'

これらのことから、本稿は、pro は Chomsky (1981) で定義される [+pronominal,

⁶ 束縛理論 (Binding Theory) によると、代名詞はその統率範疇において自由であり、照応詞はその統率範疇において束縛されなければならない。PRO が [+pronominal, +anaphoric] であれば、その統率範疇の中で束縛されると同時に自由でなければならないことになってしまう。この矛盾を避ける唯一の方法は、PRO が統率されないよう規定することである。そうすると、PRO は統率範疇をもたないことになり、問題は解消される。

⁷ Hornstein (1999) は、義務的コントロールされる PRO は照応的特徴をもち、NP-痕跡同様に移動によって派生した空範疇である。非義務的コントロールされる PRO は代名詞的特徴をもち、アジア言語の pro に相当するとする。しかし、義務的コントロールされる PRO に関する Hornstein の移動分析は Culicover & Jackendoff (2001)、Jackendoff & Culicover (2003)、Landau (2003) などにより、多くの批判を受けている。本稿は、そのような移動分析には従わないが、PRO が 2 つの異なった特徴を有するという点には同意する。

-anaphoric] 素性をもつのではなく、PRO と同様に [+pronominal] または [+anaphoric] 素性をもつと考える。つまり、pro は代名詞的 pro と照応的 pro を含む。代名詞的 pro は (25) のような伝統的に言われる“他”(彼)、“他们”(彼ら)といった代名詞と交替する pro で、照応的 pro は“自己”のような再帰代名詞と交替する pro である。そうすると、上で論じた定形コントロール補文における空主語は再帰代名詞“自己”のゼロ形式であり、照応的 pro であるということになる。

6. 他言語との比較

以上では、中国語には定形コントロール補文が存在すること、また、定形コントロール補文の空主語が“自己”(自分)といった再帰代名詞と交替する照応的 pro であることを論じた。本節では、これと同様のことが日本語にもいえることを示す。

(26) に示すように、日本語において、時制辞“(r)u”を含むコントロール補文には、空主語だけでなく顕在的再帰代名詞「自分」も出現できる (cf. Hasegawa1984/5, Uchibori2000, Takezawa1987 など)。本稿は、このようなコントロール補文は定形コントロール補文であり、補文の空主語は「自分」などの再帰代名詞に対応するゼロの照応詞であると考え⁸。

(26) a. 太郎₁ は[e1/*2/自分 1/*2 が大学院に進学する]つもりだ。

b. 太郎₁ は[e1/*2/自分/1*2 が大学院に進学すること]を決心した。

日本語にゼロ照応詞があるということの証拠は、同じ分離不可能所有構文において観察される。(27a) では、「髪の毛」の前に所有を表す要素が現れていないが、その「髪の毛」は主語「太郎」のものであると理解される。これは所有を表す「自分の」という表現を含む (27b) と同様である。このことから、(27a) には再帰代名詞に対応するゼロの照応詞が存在すると考えられる。(28) についても同様の説明が可能である。

(27) a. 太郎₁ は e1/*2 髪の毛を染めた。

b. 太郎₁ は自分 1/*2 の髪の毛を染めた。

c. 太郎₁ は彼 1/2 の髪の毛を染めた。

(28) a. 太郎₁ は爪 1/*2 を切った。

b. 太郎₁ は自分 1/*2 の爪を切った。

c. 太郎₁ は彼 1/2 の爪を切った。

一方、日本語や中国語と異なり、英語の分離不可能所有構文では顕在的代名詞を用いなければならない。

(29) a. John₁ dyed his₁/*e₁ white hair dark.

b. John₁ cut his₁/*e₁ finger on a piece of glass.

このような英語と日中語に見られる対立は、再帰代名詞に対応するゼロの照応詞を照応的 pro として分析すれば、説明することができる。周知のように、日本語や中国語は pro-

⁸ Hasegawa (1984/5), Uchibori (2000) は、異なった立場から論じてはいるものの、(26) の空主語を PRO と分析している。紙幅の関係上、Hasegawa と Uchibori の議論の問題点は別の機会に論じることとする。

脱落言語であるが、英語は pro-脱落言語ではない。pro-脱落言語では、顕在的名詞要素とゼロ要素の交替が許されるため、日本語や中国語の分離不可能所有構文では所有者が顕在的に出現しなくてもよい。一方、英語では pro がいないため、たとえ所有関係が明らかであっても所有を表す顕在的代名詞がなくてはならない。

要するに、日本語では中国語同様に、定形のコントロール補文が存在し、その補文における空主語は照応的 pro として分析可能である。

7. 本稿のまとめと今後の課題

本稿は中国語におけるコントロール補文を考察対象とし、その節タイプおよび補文の空主語の性質に着目し考察を行った。2 節では、先行研究を概観し、その問題点を指摘した。3 節では、中国語のコントロール補文には定形コントロール補文と不定形コントロール補文があることを指摘し、従来不定形節と分析されてきた一部分のコントロール補文が実は定形節であるということを論じた。4 節では、中国語ではゼロの再帰代名詞が存在する証拠を示し、定形コントロール補文における空主語は PRO ではなく、“自己”などの再帰代名詞のゼロ形式であることを主張した。また、5 節では、pro について再定義し、pro には代名詞的 pro もあれば照応的 pro もあるとし、中国語の定形コントロール補文の空主語は照応的 pro として分析可能であると論じた。最後に、6 節では、本稿で行った中国語に関する議論が日本語にも適用可能であり、通言語的な意味合いがあることを示した。

本稿では、pro と PRO は意味的には同じであり、両者は出現環境が異なるだけであると考える。しかし、両者は果たして出現環境以外に、相違点がないのかということについては今後さらに検証する必要がある。例えば、先行研究では、PRO Gate Effect が PRO の特徴であるとされているが、それについてどう説明していくべきか、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 崔玉花 (2006) 中国語結果構文と直接目的語制約——英語・日本語結果構文との比較を通じて——『筑波応用言語学研究』13: 99-112.
- 崔玉花 (2008) 中国語結果構文と非対格性——英語・日本語結果構文との比較を通じて——『筑波応用言語学研究』15: 45-58.
- 黄 衍 (1992) 汉语的空范畴『中国语文』5: 383-393.
- 石毓智 (2001) 汉语的限定动词和非限定动词之别『世界汉语教学』2: 23-27.
- 汤廷池 (2000) 漢語的「限定子句」與「非限定子句」*Language and Linguistics*1.1: 191-214.
- 徐烈炯 (1994) 与空语类有关的一些汉语语法现象『中国语文』5: 321-329.
- 徐烈炯 (1999) 从句中的空位主语『共性与个性—汉语语言学中的争议』, 159-175.
- Bouchard, Denis (1984) *On the content of empty categories*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
- Culicover, W. Peter., Jackendoff, Ray (2001) Control is not movement. *Linguistic*

- Inquiry* 32: 493-512.
- Hasegawa, Nobuko (1984/5) On the so-called 'zero pronouns' in Japanese. *The Linguistic Review* 4: 289-341.
- Hornstein, Nobert (1999) Movement and control. *Linguistic Inquiry* 30: 69-96.
- Hu, Jian-hua., Pan, Hai-hua., Xu, Lie-jiong (2001) Is there a finite vs. nonfinite distinction in Chinese? *Linguistics* 39-6: 1117-1148.
- Huang, C. -T. James (1982) *Logical relations in Chinese and the theory of grammar*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Huang, C. -T. James (1984) On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.
- Huang, C. -T. James (1989) Pro-drop in Chinese: A generalized control theory. In: Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.), *The Null Subject Parameter*, 185-214. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Huang Yan (1992) Against Chomsky's typology of empty categories. *Journal of Pragmatics* 17: 1-29.
- Kuroda, Sigeyuki (1983) What can Japanese say about government and binding? *WCCFL* 2: 153-164.
- Landau, Idan (2003) Movement out of control. *Linguistic Inquiry* 34: 471-498.
- Landau, Idan (2004) The scale of finiteness and the calculus of control. *Natural Language & Linguistic Theory* 22: 811-877.
- Landau, Idan (2006) Severing the distribution of PRO from case. *Syntax* 9:153-170.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT Press.
- Li, Yen-hui Audrey (1985) *Abstract Case in Chinese*. Ph.D. dissertation, University of Southern California, Los Angeles, CA.
- Li, Yen-hui Audrey (1990) *Order and Constituency in Mandarin Chinese*. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.
- Lin, Jo-wang (2010) A tenseless analysis of Mandarin Chinese revisited: a response to Sybesma 2007. *Linguistic Inquiry* 41: 305-329.
- Sybesma, Rint (2007) Whether we tense-agree overtly or not. *Linguistic Inquiry* 38: 580-587.
- Takezawa, Koichi (1987) *A configurational approach to case-marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Uchibori, Asako (2000) *The Syntax of Subjunctive Complements: Evidence from Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Xu, Liejiong (1986) Free empty category. *Linguistic Inquiry* 17: 75-93.